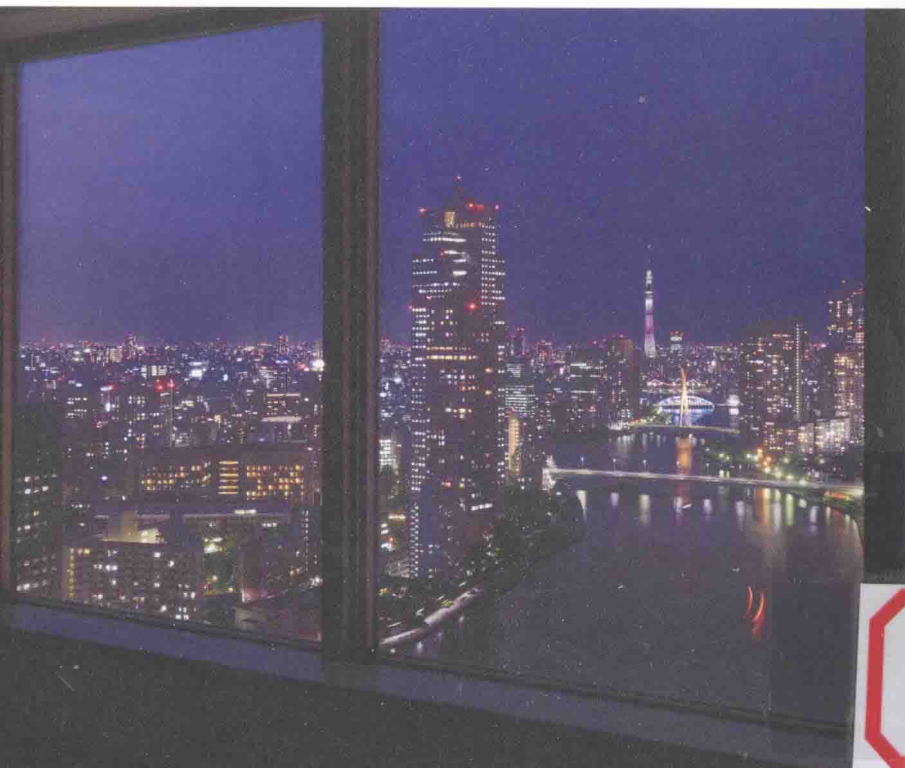


現代の正体

深夜の書斎から
日本を思い世界に及ぶ

牛島信
Shin Ushijima



現代の正体

深夜の書斎から
日本を思い世界に及ぶ

Shin Ushijima

牛島信

幻冬舎

現代の正体

深夜の書齋から日本を思い世界に及ぶ

2014年10月25日 第1刷発行

著 者 牛島 信

発行者 見城 徹



発行所 株式会社 幻冬舎

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7

電話:03(5411)6211(編集)

03(5411)6222(営業)

振替:00120-8-767643

印刷・製本所:中央精版印刷株式会社

検印廃止

万一、落丁乱丁のある場合は送料小社負担でお取替致します。小社宛にお送り下さい。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。定価はカバーに表示してあります。

©SHIN USHIJIMA, GENTOSHA 2014

Printed in Japan

ISBN978-4-344-02663-6 C0095

幻冬舎ホームページアドレス <http://www.gentosha.co.jp/>

この本に関するご意見・ご感想をメールでお寄せいただく場合は、
comment@gentosha.co.jpまで。

目次

❖ 経済

深夜の書齋から日本を思い世界に及ぶ……………6

……………13

快適さのために支払うコスト……………24

歪んだ日本の行く末……………30

「持たざる国」日本……………38

アベノミクスの行方……………46

日本が英語で世界に発信する日……………52

産業革命と世界の成り立ち……………58

集団への帰属意識……………64

コンシヤス・キャピタリズムの源泉……………70

……………77

❖ 政治

トップの采配が影響を与えるもの……………86

日中関係は、世界からどう見えるか？……………94

国民の60%が自由市場を信じていない資本主義国……………102

❖法

民法典論争と日本人の死生観	116
集団的自衛権	122

❖人生

文章の力は千古無窮	140
私のフィッツジェラルド	146
執着を手放すとき	152
夕方6時を過ぎたらドリンク・タイム	160
Do what you love ~ Love what you do	167
老いと向き合う	173
散歩の効用	180
「日の要」だけで生きるなかでこだわること	188
人の社会で一番大切なものは	195
あとがき	202

現代の正体

深夜の書齋から日本を思い世界に及ぶ

装丁 平川彰（幻冬舎デザイン室）

※この作品は下記に連載されたものに加筆・修正しました。

『月刊ザ・ローヤーズ』（2013年10月～2014年8月）

『Business Law Journal』（2013年11月～2014年9月）

なお、記事末の数字は記事の掲載月を示しています。

・P—●（⑬）：『月刊ザ・ローヤーズ』2013（2014）年●月号

・L—●（⑬）：『Business Law Journal』2013（2014）年●月号

目次

❖ 経済

深夜の書齋から日本を思い世界に及ぶ……………6

……………13

快適さのために支払うコスト……………24

歪んだ日本の行く末……………30

「持たざる国」日本……………38

アベノミクスの行方……………46

日本が英語で世界に発信する日……………52

産業革命と世界の成り立ち……………58

集団への帰属意識……………64

コンシヤス・キャピタリズムの源泉……………70

……………77

❖ 政治

トップの采配が影響を与えるもの……………86

日中関係は、世界からどう見えるか？……………94

国民の60%が自由市場を信じていない資本主義国……………102

❖ 法

民法典論争と日本人の死生観	116
集団的自衛権	122

❖ 人生

文章の力は千古無窮	140
私のフィッツジェラルド	146
執着を手放すとき	152
夕方6時を過ぎたらドリンク・タイム	160
Do what you love ~ Love what you do	167
老いと向き合う	173
散歩の効用	180
「日の要」だけで生きるなかでこだわること	188
人の社会で一番大切なものは	195
あとがき	202

深夜の書齋から日本を思い世界に及ぶ

7冊目のエッセイ集である。今度も幻冬舎に出していただいた。思いもかけなかった数になつてしまった。ありがたいことである。下手な鉄砲も数を撃てば当たるといふ。そろそろ当たりに近づいているかもしれない。いやいや、未だ足りないに決まっている。第一、エッセイは数ではない。

もうエッセイの連載を始めて10年を超えた。

エッセイを書く作業は、漠然とした心のなかの思いを書き言葉に結晶させる作業である。だから、ふと思いついたことについて、それをそれと意識して言葉に紡ぐ過程で深く考えを

巡らすことになる。第一稿を書くについてもそうした考察を二度、三度と繰り返す。ゲラが戻ってくると、牛が一度食べたものを反芻する^{はんすう}ように、ゲラに手を入れる。時には三度にも四度にもなる。自分の文章を客観視する機会である。つまり、自分の心を自分の手の平に乗せて眺めるのである。

つい最近、恩師が『日本人に生まれて、まあよかった』（平川祐弘著 新潮新書）という本を出された。どうして「まあ」なのかと不思議に思いながら一読、すぐに得心した。

しかし読み終わってから、私に限っては「まあ」は要らないかもしれないなどと余計なことを考えた。44年前の不肖の弟子は相変わらず不肖の弟子のままのようである。

私はつねづね、世界中の人間が日本人のように暮らしたらいいだろうに、なかなかそうは行かないものらしいなあ、と残念に感じている。私とて、それはそうは行かないに決まっていると分らないのではない。ナイーブとしか言いようのない思いだと承知のうえのことである。誰しも自分の生まれ育った環境は、自分自身の一部なのであり、着慣れたパジャマのように肌になじんでいて気持ちがいなものなのだ。いわんや母国である。言葉の問題もある。私は、日本に住んでいて、真面目な態度で人生を送ろうとする人たちに取り巻かれている。

話すにも書くにも、何を制限されるのでもない。空腹になれば腹一杯食べ、疲れれば柔らかな布団で眠り、蛇口をひねればお湯の出る快適な家に住んでいる。外を出歩いてどこも安全で清潔である。そんな日本が私は好きなのである。好きでたまらないと言ってもいい。たとえば、夜のコンビニである。コンビニというものの自体が、小さいながらも便利で夢に溢れた、小体こていなど呼びたくなる施設である。夜、コンビニの外に置かれた青いプラスチックの長椅子に座って、買ったばかりの冷えた缶ビールの栓を開けるときのしみじみとした感慨は人生の確かな一瞬である。こんな素適な国に生まれた幸運を何ものかに感謝しながら、私は静かに缶を傾ける。

要するに、こんな素晴らしい国が世界のほかのどこにあらうかと思っているのだ。毎日毎日感謝しながら生きている。特に自慢したいというのではない。押し付けるなどという考えは毛頭ない。ただ、外国人の友人たちも例外なく日本で暮らしていることを喜んでいうるので、自分が日本人だから身勝手な感覚を持っているというわけでもなさそうだと独り納得しているだけである。ほかの国の人も、きっと私の立場にいれば、ああこの国に生きていてよかったと感じるのだらうかと、勝手に納得しているのである。その国籍は欧米だけではない。中国も含まれる。ほかのアジアの国々はもちろんである。

その日本は、もう2000年以上続いている。21世紀を生きる私にとっては、明治維新が重要である。あのとき、私の曾祖父、高祖父にあたる人たちが苦勞して今の日本の礎をつくってくれたのだ。イギリスやフランスの植民地になる可能性はあったのである。そうやっていても、今は独立した日本があるに違いない。だが私は、インドが、アフリカが、そのほかの植民地だった国々が、独立のためにどれほどの苦勞を経なければならなかったかを知っている。私が振り返って学ぶ明治、大正、昭和の歴史は、先人に感謝することばかりである。そうした時代の日本に批判、非難があること、その一部は当たっているかもしれないことを知らないではない。しかし、私はのんきに、どの国にしても完全無欠ということもあるまいと先ず考えるのである。やはり恩師にならって「まあ」を入れることにしたい。

さらに、待てよと考える。なんの理由もなく豊かで美しい国に生まれ、当たり前のようにその国の空気を吸って生きていることが漠然とした不安の種でなくもないからだ。私が日本に生まれたことに理由はない。それは、気が付いたらそうであつたのだ。だから、地中海を小舟に乗ってアフリカからヨーロッパに行こうとする人々のことが気になってならない。もちろん、身を日本に置いたまま氣にするのである。

日本について何よりも誇らしいことは、日本という国が、非白人で初めて西洋に追いつき、

独自の近代文明を創りあげたことである。そのために鷗外や漱石の時代の人々がどれほどの努力、精進をしたかを思い返してみると、いつも我が身を恥じ入るほかない。どうもこの三代目は、先人の遺産の上に座ってぼんやりと生きているなという自覚がこの身を浸すのである。それでも、日本は私をいつもやさしく包んでくれる。

いや、断っておくが、何もかも整っていて欠点がないなどと思っているのではない。私にも人並みの知性はあるから、足りないこと、堪えられないことを挙げてみればきりがなくとくらい承知している。より良くするために少しでもお役に立ちたいものだとも願っている。だが、この日本は私にはなんとも心地よいのである。

だから、私は時に日本の使命を思う。日本の世界に対する、歴史に対する、人類に対する使命のことである。白人主導の国はさて置く。多くが十分に自足しているように見えるからである。私の頭に浮かぶのは、非白人の、かつて白人の植民地だった国、地域の未来への日本の使命である。インドの手織り木綿の進出に対抗して産業革命を成し遂げたイギリスやそのほかの西洋諸国が、あげくに大砲と軍艦をつくり出した歴史が過去にある。日本もその一員だった時代がある。しかし、私の思うのはそうではない未来である。平和ということが一番にある。次に豊かさが来る。いや、一定の豊かさがなければ平和も覚束ないのが人間かも

しれないとも思う。

しかし、人にとって最も大事なものは、心の平安である。しみじみとした幸せ感である。その思いのうちに死ぬことである。

だから、私が日本に暮らして幸せ感を抱いているように、世界中の人々があまね遍く同じ感慨を持つことができればどんなによいだろうと思ってしまうのである。

私の思いは滑稽かもしれない。しかし、それでも私は、そうなるために日本に何ができるのかを考え、実行しなくてはならないと思うのである。心の平安は、外から押し付けることなどできようはずもない。それぞれの国の人々の、一人ひとりが、それぞれの立場で決めることである。ただ、そのときに、ああ日本というやり方で幸せ感に包まれて暮らしている大勢の人々がこの世にいるなと思いついてもらえれば、それでよいのだ。それは、そうではない人々にとっての希望であり得るからである。ドアを叩いてもらえば喜んで家のなかに招き入れ、話に興ずることだろう。できるお手伝いなら喜んでするだろう。

現実を目を瞑っている愚かな姿？　そうかもしれない。しかし、人は幸せに生きるために生きているのである。苦しむ結果になってしまったり、悲しい思いで終わってしまうにしても、そんなことを目的に生きているわけではない。